

畢竟はみな信のみちを本とす、たがひのこゝろざしおなじくまじはりしたしむを心友といふ、こゝろざしはちがひぬれども、筋目あるか、或は同郷隣家あるひは同官同職などにて、さいく相まじはりてしたしきを面友といふ、一目しる人も面友のうちなり、心友面友ともに情義の親疎おなじからず、そのほどくゝの義理にしたがひて、威義うやくしく、挨拶和厚にして、いつはりなく、もちろん約束などのすこしも違變なきが、信のみちの大がいなり、

〔先哲叢談 四〕米川一貞字幹叔、小字義兵衛、號操軒、

操軒壹奉程朱之說、四子小近書易等外、不欲泛觀他書、舊與伊藤仁齋善、及仁齋唱古義、以非斥宋儒、乃修書曰、朱子得聖人之道、吾子持異言排之、語養德之學、則爲薄德、語講學之事、則無益於學、是謂之聖教罪人、速改之、則止矣、不則雖契分日久、不得不絶焉、其言切至、而仁齋不聽焉、遂贈絶交書、

〔先哲叢談 五〕淺見安正略中、號絢齋、

絢齋少佐藤直方二歲、初友義甚親、然嘗面折直方親喪未除、出仕、以是遂絶交、默識錄曰、絢齋先生與直方先生、初其交如兄弟、後不相通、然而義亦無可言者、乃是氣質之一癖、學問之大疵、甚可惜、直方先生、後來思舊交、有將通問之意、絢齋先生終執而不肯、

〔日本書紀 二代〕先是天稚彥在於葦原中國也、與味耜高彥根神ウレハシノカミ友善、味耜此云、須岐故味耜高彥根神昇天

弔喪時、此神容貌正類天稚彥平生之儀、故天稚彥親屬妻子皆謂、吾君猶在、則攀牽衣帶、且喜且慟、時味耜高彥根神忿然作色曰、朋友之道、理宜相弔、故不憚汗穢、遠自起起恐、哀何爲誤我於亡者、

〔日本書紀 九〕爰伐新羅之明年、元年中略更遷小竹宮、小竹此云、之勢適是時也、晝暗如夜、已經多日、中略巷里

有一人曰、小竹祝與天野祝共爲善友、小竹祝逢病而死之、天野祝血泣曰、吾也生爲交友、何死之無同穴乎、則伏屍側而自死、仍合葬焉、蓋是之乎、乃開幕視之、實也、故更改棺櫬各異處、以埋之、則日暉炳燦、日夜有別、